



Dr. Tetsu NAKAMURA
% Mission Hospital Peshawar
Peshawar, N. W. F. P
PAKISTAN

お元気ですか。

ペシャワールは久しぶりに雨が降りました。

一昨日はここ北西辺境州では一つの大きな出来事が人々の心をゆさぶりました。「辺境のガンジー」と言われたアブドゥル・ガファール・カーンが99歳で亡くなったのです。

彼は、英国統治時代に徹底した反英運動でガンジーを助け“赤シャツ隊”で名をとどろかした歴史的な人物で、ほとんど伝説的となった人物です。元来パキスタンの北西辺境州は、アフガニスタンと同一民族で、もちろん言語も同一のパシトゥン民族です。パキスタン側からみれば“分離運動”であるパシュトニスタン（パシュトゥン人の国）運動も彼の強力な主張の下に大きな政治運動としてもありあがりました。

アフガンの内乱などの複雑な政情の中で、彼の構想は政治的な主流となり得なかったけれど、この民族主義的な感情はこの辺境では、一つの中央に対する反省として基本的な色調をなしています。「パキスタン国家」を生涯拒否しつづけた彼は、パキスタンの中ではなくアフガニスタンで埋葬するように遺言をのこしていました。

文字通り国境をこえて、ペシャワール近郊のマルダグからカイバル峠をこえて葬送の列が続きました。冷い雨の

降る重苦しい空の下に、何万人もの人々が集まって遺体を見送りました。戦闘は停止して誰もが、この伝説の聖者に敬礼しました。

「パシュトニスタン！」、植民地時代に西欧諸国によって勝手に決められた国境線と分断された民族。その中でそれは一つの赤い灯でした。考えてみれば私の仕事とても、この人工的な国境線さえなければ、何も難民問題などにまきこまれず、おおらかに安全にやれたのです。

愚かなことです。植民地支配の後遺症が未だにこの国を悩ましていることを改めて感じさせられました。そして今また米ソのはざまでの余りに大きな犠牲。一人の年をとった退役軍人が人だかりの中で私に言いました。「もうたくさんた。カーウボーイたちとコサックたちをシベリアかアラスカででも戦わせろ！ おれたちはやつらのおかげでバラバラだ」

平和の祈りは本当にここでは切実です。私も重い気持ちでこの壮大な葬送に祈りをこめました。